

おとな・り(re)スタッフの 喜怒“愛”楽

“世田谷を愛する”おとな・り(re)スタッフの日々のできごと・ひとりごと

桜と清流の マイプロムナード



世田谷で桜と言えば、桜新町、深沢である。深沢にはいくつかの桜並木が残っているがそのルーツは大正初期に遡る。山林だったこの辺りは郊外型高級分譲地として開発され、記念に千数百本の桜が植えられたというから、当時はさぞや壮大な桜の風景だったのだろう。

散歩に最適なのは呑川沿いの緑道。暗渠にせず今も爽やかな清流が流れ、桜だけでなく、水辺の植物や四季の花々が楽しめる。初夏には子ガモを引き連れたカルガモ親子に遭遇する幸運も！ そんな景色をぶち壊す流れに捨てられたゴミを見ると悲しくなるが、「カルガモ、もう少し先にいますよ」と見知らぬ人が親切に声を掛けてくれるのもこの散歩の楽しさだ。

世田谷の地域風景資産にもなっている、大切にしたい私の散歩道である。

(写真・文/佃優子)

毎月一、二回は絶対観に行くお能。大好きだ。「何がそんなに面白いの？」とよく聞かれる。何だろう。十年位前に読んだ「お能は動かないから面白い」という白洲正子の随筆がきっかけだ。動かなかつたら面白くないじゃないか、と思って通い始めた。何年も通って面白さが分かったかと問われると、実はよく分からない。謡はコーラス、衣装は豪華で、お能は総合芸術だとはよく言われるから、謡や季節ごとに変わる衣装を楽しんでもいいだろう。しかし私が能楽堂に通う本当の理由は少し違うようだ。シテ(主人公)

が舞台中央で何も言わずじっと動かない。極限までそぎ落とされたシテの思いとその世界を共有できたと思うとき、とても心地いい。時にはそのまま眠ってしまったりもするのだが、目覚めてもシテはまだ舞台中央。夢か現かの世界は続いている…。



「お能」つて…

(文/桜井洋子)

自分の街を 愛せる人が 世田谷人



23区の住民気質や長所・短所を書いた本が何冊か書店にあった。我が世田谷区はどう思われているのかとやはり気になる。私はマスメディアの流す情報に対しては常に半信半疑というスタンス。その本はさまざまなデータを基に若い編集チームが概ね色眼鏡調でデフォルメした印象だったので、自分は「ふ〜ん」としか思わなかったのだけど。

カタカナ職業人のライフスタイルやおしゃれな店の紹介が多いためか“世田谷区民である”ことを知人に言うと、何か誤解された経験はないだろうか。私の知る限り大半は庶民。では私のイメージする世田谷らしい人とは…。心豊かで街をきれいにし、都会と郊外の良さを備えた天然の育ちの良さがにじみ出る人。あと、「おとな・り(re)」ボランティアスタッフのような、アクティブでコミュニティ活動をする前向きな中高年世代、が多いということですかね！

(文/宮腰昌男)